

地図から消えた街 ——コザの名と共に消えたもの——

金子 彩里香

目次

はじめに

1. 本書の概要
2. コザの成立—「米琉親善の楽園」—
 - 2-1. 「基地の街コザ」の成り立ち
 - 2-2. 「米琉親善」の欺瞞—呑み込まれた告発—
 - 2-3. 「八重島特飲街」—「性の防波堤」として—
 - 2-4. 「島ぐるみ闘争」—オフリミツによる経済制裁—
3. Aサイン社会—「米琉親善」の破綻—
 - 3-1. 「ベトナム戦争の最前線」Aサインバー
 - 3-2. 「コザ暴動」—燃えるコザ—
4. 地図から消えたコザ

はじめに

かつてコザと呼ばれた街があった。1974年「コザ市」から「沖縄市」へと名称が変更され、地図から「コザ」は消えた。コザ（現沖縄市）は、沖縄県本島の中部に位置しており、北は恩納村・うるま市、南は北谷町・北中城村、西は嘉手納町・読谷村、南東は中城湾に接している。また、コザは嘉手納町、北谷町にもまたがる嘉手納基地（飛行場）に隣接しており、その門前町として「発展」したと言われている（2013年現在も嘉手納基地は返還されていない）¹。

名称が変更された同年の1974年、沖縄市は「国際文化観光都市」に指定され、「基地経済脱却」を目指した。しかし、「基地脱却」を目指しながらも嘉手納基地は置かれ続け、沖縄市はむしろ基地を利用する形で「アメリカ的文化」を売り出している。コザという地名は消えたはずであったが、未だ街の至るところに「コザ」という文字が並んでいる。この矛盾した状況は一体何であろうか。

本稿は『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』（石原昌家ゼミナール、1994）を用いながら、最新の研究鳥山（2013）、小野沢（2013）を踏まえ、「米琉親善」という視点からベトナム戦時期に最盛期

を迎える戦後コザの「Aサイン社会」—「米琉親善」の矛盾が最大化する空間—で生きた人々の生き様を考察することを目的とする。

第1章では、本書の概要、先行研究について検討する。第2章では、戦後コザが「米琉親善の楽園」として成立した過程を明らかにする。その過程から沖縄社会におけるコザの位置付け、分断が浮かび上がる。第3章ではベトナム戦時期の「Aサイン社会」を「米琉親善」が具現化された空間として捉え、ロックミュージシャンである喜屋武夫妻や彼らの経験した「コザ暴動」に焦点を当てながらより具体的に「親善」の矛盾や亀裂を考察していく。「米琉親善」とは人々の生活に浸透し、個人が自分を「何者か」規定してしまうほど強い影響力を持つ。そのため本稿では、あえて特定の個人に焦点を当て考察を行う。第4章においては、2013年現在におけるコザの空間、そしてそこに生きる人々に未だ深く残存している記憶や積み重ねてきた時間について見ていきたい。

1. 本書の概要

本章では、石原ゼミナール『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』の構成、内容を踏まえ学術的意義を考察する。

本書は、沖縄国際大学文学部社会学科の石原昌家²が主催するゼミナールの1992年度3年次社会学演習で3冊発行された調査記録研究書の第一集である³。石原ゼミの学生によって執筆された。

² 石原昌家：1941年台湾宜蘭市に生まれる。那覇市首里出身。1966年大阪外語大学、1970年大阪市立大学大学院文学研究科修士課程修了。沖縄国際大学文学部教授（社会学専攻）を経て、現在沖縄国際大学名誉教授。沖縄県「平和の礎」刻銘検討委員会座長、沖縄県立平和祈念資料館監修委員などを務めた。主な著作に主な著書に『虐殺の島』（1978）、『うまんちゅぬすくぢから』（1979）、『大密貿易の時代』（1982）、『空白の沖縄社会史』（2000）晩聲社、『証言・沖縄戦』（1984）青木書店『争点・沖縄戦の記憶』（2002）社会評論社、『ピース・ナウ沖縄戦』（編）（2011）法律文化社。その他、共著、沖縄県史・各市町村史の執筆・編集、論文など多数。

³ コザのセンター通りが「中央パークアベニュー」として

¹ 沖縄市ホームページ「沖縄市の基地概況」（アクセス日2013年9月13日）。

緻密な沖縄戦後史の分析と膨大な証言によって構成されているのが特徴である。

全II部、全9章で構成されており、1945年から1992年までを考察対象としている⁴。本書は1945年から1992年を8つに時代区分し、その時代区分に沿って章立てしている。各時代における世界的情勢、日本の情勢、沖縄の情勢を踏まえ、世界における沖縄の位置を明確化した上で本書のメインであるコザの街における社会背景、民衆生活と音楽文化を詳細に分析していく手法をとる。

第I部「冷戦の煽りを受けて」は、1945～1959年を考察している。第1章（1945～1949）極東最大の嘉手納基地の出現と“百鬼夜行”の時代⁵、第2章（1950～1953）朝鮮戦争の時代、第3章（1954～1957）島ぐるみ闘争の時代、第4章（1958～1959）B円から本国ドルへと切り替えられた沖縄経済変動の時代⁶としてそれぞれ描かれている⁷。

第II部「ベトナム戦争の狭間で」は、1960～1992

大きく様変わりし、取り壊しが決まった1984年より沖縄市史編集室と共同で調査をしたことが始まりであった。しかし、調査報告書は未完成のまま1991年まで至る。このような経緯を経て、1991年度社会学実習（石原ゼミ）では、1984年度の補足調査を兼ねながら、センター通りのその後の変遷、戦後コザの民衆生活と沖縄ロックを中心とした音楽文化を調査研究することとなる。沖縄市史編集室の全面的な協力を得た。

⁴ 序章「沖縄文化音楽のルーツ」において1609年から1945年までの戦前の琉球の歴史と音楽文化について概観している。1609年の薩摩侵略によって琉球は薩摩の支配下に置かれ、1879年には明治政府による琉球処分により「沖縄県」となった。その後、太平洋戦争では「捨て石」作戦に使われることとなる（石原ゼミナール、1992、p. 21）。

⁵ 「極東最大の嘉手納基地の出現と“百鬼夜行”の時代」：本書では第1章について「これら戦中および終戦直後へと激変していく中での民衆の生活・文化を、苦境の中にありながらも、自らの生きる術をたくましく見いだしていった住民の姿を通して見ていくことにする」と述べている。沖縄戦を生き延びた沖縄の住民は米軍の収容所生活から「戦後」のスタートを切った。“百鬼夜行”とは、収容所における「食糧難や疫病の蔓延、米軍による広大な土地の接収、米兵による婦女暴行、殺人等の多発」といったアメリカによる占領の状況を示していると思われる（同上、p. 31）。

⁶ 「B円から本国ドルへと切り替えられた沖縄経済変動の時代」：第4章では「1958年～59年の2年間に起こった、沖縄の政治、米軍統治下の大衆運動や人々の生活、文化などを対象」としている。具体的には、第3章で扱われた島ぐるみ闘争の影響を受け、1958年9月に沖縄の通貨をB円からドルへと切り替えたことを経済的な転換期として論じている（同上、p. 151）。

⁷ 同上、p. 6。

年までを考察対象としており、「ベトナム戦争の経過を追いながら、直接その影響を受けてきた沖縄の様相」⁸を明らかにしている。第5章（1960～1963）〈第I期〉米軍が間接的にベトナム戦争へ介入した時代、第6章（1964～1967）〈第II期〉ベトナム戦争が本格化した時代、第7章（1968～1972）〈第III期〉米軍の敗色濃厚なベトナム戦争と沖縄が「日本復帰」を遂げた時代、第8章（1973～1992）「アメリカ世」から「大和世」へ沖縄が組み込まれていった後における沖縄社会の変遷と今後の展望⁹として位置づけられている¹⁰。

コザに関する研究は、鳥山（2013）¹¹、小野沢（2013）¹²や沖縄市が発行している『コザ市史』、『KOZA BUNAK BOX』など数多い。だが本書は、

⁸ 同上、p. 167。

⁹ 『「アメリカ世」から「大和世」へ沖縄が組み込まれていった後における沖縄社会の変遷と今後の展望』：第5章は、沖縄がアメリカの直接統治下に置かれてきた「アメリカ世」から1972年の「祖国復帰」を果たし「大和世」へと沖縄が変わっていく時期を扱っている。本章の特徴としては、「社会情勢にほとんど触れることなく、むしろこれら沖縄戦後史を生き抜いてきた民衆やミュージシャン等の現在における生活や、激動的歴史を通して彼らが身につけた生活経験による意識の変化などを中心に」記述している点である（同上、p. 167）。

¹⁰ 同上、p. 6。

¹¹ 鳥山は『沖縄／基地社会の起源と相克』（2013）において戦後の沖縄（1946年～56年まで）で「圧倒的な支配関係のもとで唱えられてきた協力の論理がいかなる不条理や亀裂を抱えてきたのか、その破綻とともに人々のあいだでいかなる動きが生み出されたのかを考察」している。さらに、「占領下で唱えられる『協力』の論理を視野に入れ、そこに塗り込められた支配関係を感じすることは、沖縄における『戦後』に刻まれた断裂を捉え、それを生み出す支配構造がいまなお解消されていないことを確認することにつながっている」として、その「協力」と「破綻」を戦後のコザにおいて「親善」をキーワードに明らかにしている。しかし、あくまで1945年から1956年という大きな流れにおいての考察であり、人々に実際にはどのように影響を与えたのかについての考察は行っていない。本書からコザの成立に関する当時の住民の証言を引用している以外、言及はない。

¹² 小野沢は「米軍統治下沖縄における性産業と女性たち」（2013）において「嘉手納基地に隣接した『基地の街』として名高いコザ市の、一九六〇～七〇年代初頭にかけての時期における商工業の就業構成をジェンダーの視点から分析するとともに、性産業の形態とその変化、そこでの女性労働を検証」している。小野沢は本書について「コザの都市形成に関していくつかもいくつかの仕事がある」とした上で、「オキナワン・ロックのミュージシャンの活動の場となったAサインバーの経営者からも聞き取りをしている」と言及しているのみであり、本書に関する批判的検討は見られない。

「民衆生活と音楽文化」の分野において当時のコザの住民やロックミュージシャンたちの証言をふんだんに用いて戦後コザを描き出している点において他の研究とは決定的に異なる¹³。本書で紹介されている戦後コザに関する彼らの証言は貴重である。「戦後」米軍の支配下に置かれた沖縄においてアメリカのカネで食っていたコザの住民は同じ沖縄社会の人々から「汚い仕事で金儲けしている」人々と見られることが多く¹⁴、沖縄市となった現在も口を噤む者は数多い¹⁵。

本書の証言者は喜屋武幸雄、ジョージ・紫、川満勝弘、喜納昌吉など名立たるロックミュージシャンの他、元沖縄市助役、元信用保証協会理事長、元警察官、元レストラン経営者、元Aサイン組合会長など多岐に渡る。仮名の証言者も数多い。膨大な量の証言となっているため、内容が重複、矛盾している箇所もあるが、「個々人から発せられた生の声であり、人間が独自に持ち備える生活史でもあるがゆえに、それぞれの持つ質的相違と、複数証言ということをも尊重」¹⁶するとしてあえて全ての証言を紹介している。

多岐に渡る証言者の中でもロックミュージシャンたちを重点的に聴き取り調査している¹⁷。というのも、本書では彼らを「支配者である米兵を相手に最前線で闘ってきたロッカー」¹⁸と評し、彼らの視点から沖縄の戦後史を総括することにより「従来までの歴史の闇に埋もれていた新たな沖縄の史実」¹⁹を再発見できたことに意義を見出しているからだ。

本稿では、特にロックミュージシャンである喜屋武幸雄・眞理子夫妻に焦点を当て「Aサイン社会」を考察する。ロックミュージシャンにあえて焦点を当てることは重要な意味を持つ。ベトナム戦争当時ロックミュージシャンはAサインバーで米兵相手に「沖縄ロック」を演奏し莫大なカネを稼いだ。「鬼畜米英」と言われたアメリカのカネで生計を立てる「疾しさ」を肌身でひしひしと感じ

る「最前線」で彼らは演奏していたのだ。しかし、「疾しさ」と同時にアメリカンロックに対する憧れ、純粋に音楽の腕を上げたいという願望がそこにはあった。彼らにとっては「ハーフ」が褒め言葉であった²⁰。もちろん「疾しさ」は彼らのみならずAサイン業者も感じていただろう。だが、生計を立てるためだけではなく、アメリカに対する憧れを持ち「沖縄ロック」を作り上げていったという点においてはその他の証言者と決定的に異なる。その「疾しさ」と「憧れ」を同時に抱えた彼らが証言することはより一層の困難を伴うことが想像できるが、だからこそ彼らの証言にはコザの抱えた「米琉親善」の矛盾がありありと浮かび上がるのである。

証言で構成する難しさとも言えるが、本書は男性に比べ女性の証言が数少ないことを指摘しておきたい。女性に関する証言の大半は男性によるものである。コザの歴史を性や女性の問題を抜きに語ることはできないが、売春婦、Aサインバーで働いていた女性たちが自ら実名を出し、語ることは容易ではない。

2. コザの成立—「米琉親善の楽園」—

戦前、コザは越来村と呼ばれる純農村地帯であった²¹。コザが純農村から嘉手納基地が建設され米兵を対象にした商業街、特飲街（売春街）へと変わっていく過程には米軍側の思惑、そして住民側の思惑が動いていた。本章では、それぞれの思惑がどのように交錯し一致していくのか明らかにしていく。

2-1. 「基地の街コザ」の成り立ち

コザの成り立ちを語るためには沖縄戦まで遡らなければならない。1945年4月1日に沖縄本島中部に上陸した米軍は、その日のうちに旧日本軍が使用していた嘉手納飛行場（旧中飛行場）を占拠し²²、翌日、嘉間良に避難民収容地区を設置した²³。嘉間良を含めた臨時集落一帯は、「キャンプ・

¹³ 本書では、学生による聴き取り調査を行っており、24名から2時間テープ36本分の証言を得た。

¹⁴ 石原ゼミナール、前掲書、p. 193。

¹⁵ 同上、p. 275。

¹⁶ 同上、p. 6。

¹⁷ ロックミュージシャンや民謡界の人々に対する聴き取り調査は一人約5～6時間と長時間に及んだ。

¹⁸ 石原ゼミナール、前掲書、p. 7。

¹⁹ 同上、p. 7。

²⁰ 利根川、1989、p. 156。

²¹ コザという地名は、戦後米軍によって名付けられた地名である。コザという名称の由来は諸説ある。

²² 鳥山、2013、p. 16。米軍は、1945年4月5日に布告第一号であるニミツ布告を発し、日本の統治権停止、軍政の施行を宣言した。

²³ 石原ゼミナール、前掲書、p. 47。

コザ」と呼ばれ、那覇、北谷村、読谷村などコザ以外の様々な地域の出身者が収容された。1945年10月には帰還許可が出されたが、戦後、コザの人口は減少したままであった。米軍の統計によるとコザの人口は1940年の89,599人から1946年には17,755人へと大幅に減少している²⁴。人口が減少した要因の1つは米軍による土地接収である。当時、コザは村の3分の2の土地を米軍に占拠され、住民たちは戻ろうにも戻れなかったのである。旧日本軍が使用していた嘉手納飛行場は約40倍に拡張され、その後嘉手納弾薬庫(1945)、キャンプ端慶覧(1945)、泡瀬通信施設(1945)及びキャンプ・シールズ(1950)と計5つの米軍基地関連施設が建設されていった²⁵。

さらに、1949年には「基地周辺1マイル建築禁止令」が発令され、米軍接収地域から1マイル以内の建造物の建築が禁止された²⁶。越来村は1マイル以内に入っていたため、わずかに残った土地にさえ建物を建てることができない状況に追い込まれた。そのため村長の城間は復興には土地の返還、建築禁止令の撤廃が何より不可欠と考え、「歓楽街の建設が認可されることによって、軍用地の開放と建築禁止令の解除が実現し、ドル獲得の拠点になるという構想」―「ビジネスセンター構想」―を打ち出していく²⁷。

だが、この構想は住民の間に対立を引き起こすこととなる。わずかに残った土地を所有するコザ出身者(住民)は、純農村として復興を果たすことを望んだ。一方で、「キャンプ・コザ」より元の居住区に帰還することができず越来村に残留した住民、及びコザ出身者であっても基地に土地が接収されてしまった者たちは、都市化により商業で生計を立てていこうと考えたのである。城間はその代表であり、数の面ではコザ出身者(住民)を上回っていた²⁸。当時を知る住民は次のように証言している。

城間さんたちの考え方は、「自分たちのところ

はもう米軍が土地を敷きならして飛行場も拡張しているし、兵舎も出来あがっているから帰ろうにももう帰れはしない。そうであれば残った住居地区に街を作って都市化しよう。これだけの軍人軍属もいるから商売をして、それで街づくりしていこう」というものでした。しかし、大山先生をはじめ、返還された居住地区の皆さんは「何言っているんだ街が出来るわけがない、農村でいいんだ。だから土地が返還されたら農業すればいいんだ」という意見を出してきました。軍用地住民は避難民であり、自分の土地に帰れたのは地元民という、軍用地住民対地元民の争いのなかで、このような考え方の違いがでてきたわけです²⁹。

しかし、土地の返還を求めることは極めて困難な状況にあった。1949年の中華人民共和国の成立、1950年に勃発した朝鮮戦争により恒久的な米軍基地建設が始まったからである³⁰。そのような状況の中で「帰ろうにも帰れはしない」という城間の言葉が説得性を帯びていった。城間は建築禁止令の出た理由を「第一に泥棒が入り込む、第二に衛生状況が悪い。第三に売春が多い」³¹ことであると突き止め、「徹底的な清掃作業」そして「道義高揚運動」を推し進めていった³²。この運動は、「盗難防止と売買春追放」を目的³³としており、「特殊婦人」を隔離する後の「八重島特飲街計画」へと繋がっていくのである。

一方、米軍の思惑はどうであったのか。米軍政府は1948年「沖縄の住民と米軍人との親善および経済的に困窮した沖縄の人びとへの現金収入の術を与えることを目的とした歓楽街構想」を示し、越来村をそのテストケースとして選んだ³⁴。

この「歓楽街構想」は、対沖縄政策の転換の表れであった。米軍政府はそれまでの場当たりの統治政策を改め、戦後沖縄の復興計画と「民主化」政策をこの時期に打ち出したのだ³⁵。これは、沖

²⁴ 鳥山、前掲書、p. 29。

²⁵ 新崎、2005、p. 13。沖縄市ホームページ「沖縄市の基地概況」(アクセス日2013年9月13日)。

²⁶ 石原ゼミナール、前掲書、pp. 93-94。

²⁷ 鳥山、前掲書、p. 157。

²⁸ 同上、p. 92。

²⁹ 石原ゼミナール、前掲書、p. 92。大山先生とは、当時の村会議員大山朝常氏のことである。

³⁰ 中野・新崎、1976、p. 39。

³¹ 城間、1982、p. 288。

³² 同上、p. 289。

³³ 同上、p. 289。

³⁴ 石原ゼミナール、前掲書、p. 95。

³⁵ 中野・新崎、前掲書、p. 39。

縄「復興」の手段であり、米軍「支配」の確立を意味している。その転換に伴い住民と米軍の接触を避ける「隔離政策」“non-fraternization policy”（友好を排する）は、住民と米軍の友好を目指す「親善政策」へと変わっていった³⁶。この変化は城間の証言からも垣間見える。「明朗快活に米人も沖縄人も共に楽しむ米琉親善の楽園としたい」、「交換されたドルは貿易資金になるので、米琉親善の殿堂であると同時にドル貨獲得の機関にもなる」³⁷と彼は青写真を描いてみせた。

城間は『私の戦後史』において、1949年11月、軍政府関係者も出席した村民大会を開催し、「村民の総意」として軍用地開放を要請したと証言している³⁸。しかしながら、果たしてそれは「村民の総意」と呼べるものだったのだろうか。商業化を進める軍用地住民と農村としての復興を望む地元民の対立は、軍用地住民の数の優位性、米軍側の「親善政策」への転換によってむしろ否応なしに崩されていったと考えられる。1950年4月「ビジネスセンター用地」の開放が正式に決定し、建築禁止令が解かれた。城間は「快哉を叫んだ」³⁹。

こうして1950年センター通り（白人街）、八重島（特飲街）が建設され、1951年にはコザ十字路にコザ十字路市場（コザ住民向け）が設置された。十字路周辺は、白人向け、黒人向けと人種によって住み分けられ売買春が行われた⁴⁰。1953年にはコザ住民向けの飲み屋街「中の町」が誕生している⁴¹。

「米琉親善の楽園」として具現化された「ビジネスセンター構想」は、両者の思惑が「一致」した構想であったといえる。土地開放のため衛生強化、売春追放運動が米軍側に評価されたことから、当初の歓楽街設置候補地であった那覇から越来村にテストケースが変更された⁴²。「勝ち取った」と言っても過言ではない。村側にとってこの構想は生き抜くべく唯一の方法であった。だが、米軍にとって「歓楽街構想」は沖縄を復興させ基地経済に組み込み、基地と街を表裏一体の関係性に落と

し込むひとつの統治の手段でしかなかった。「親善による復興」という両者の思惑の「一致」により、コザは商業街、特飲街へと変貌を遂げていった。

2-2. 「米琉親善」の欺瞞—呑み込まれた告発—

「親善による復興」における「親善」とは何を意味するのか。アメリカと琉球（沖縄）どちらが「親善」を用いるかによってその意味は異なる。「米琉親善」と表現するのか、あるいは「琉米親善」と表現するのか、「米」「琉」の順番が変わるだけですらその付与される意味は異なるだろう。城間は「米琉親善」という言葉をしばしば使った。支配者であるアメリカと被支配者である琉球（沖縄）の関係性が「米琉」の二文字に表れているのである。

「親善」とは、「米琉親善」と言われるように、国と国の関係、国際親善のことを指す。アメリカと沖縄の両者はあたかも「対等」であるかのような関係性を構築し、実際にそのような振る舞いを要請する。しかし、実際の関係性は非対称であり、その要請は支配者側からなされるのである。

当時、アメリカが支配者であり、沖縄が被支配者であった。越来村はそのアメリカの巨大な嘉手納基地によって農村として復興する手立てを奪われた。現実には「対等」たり得ない関係性を文字上では「米」「琉」「親善」と「対等」に見せかける欺瞞性があり、現実を覆い隠す。虚構の世界である。現在まで「日米友好」と形を変えて「親善」は続く。

当時、城間は「親善」を生きる手段と考えていた。鳥山は「現実に即した対策」を求める城間を「帰郷を阻む事態を生みだしてきた占領統治の大枠を黙認し、その中で生きのびるための方途を追求するという意味において、どこまでも『現実的』とした上で、「米琉親善」にまとりつくいだちを同時に抱えていたと指摘する⁴³。

まず、ここで城間の生い立ちを簡単に振り返りたい。越来村出身の城間は、教師になった後、上京し英語学校へ通った⁴⁴。当時を城間は「琉球人」という差別が、根強く残っているころだ。私は負けたくない一心で、真剣に勉強した。」⁴⁵と振り返っている。沖縄戦では鉄血勤皇隊に所属していた

³⁶ 大城、1977、p. 53。

³⁷ 鳥山、2006、pp. 203-204。

³⁸ 城間、前掲書、p. 292。

³⁹ 同上、p. 293。

⁴⁰ 小野沢、2013、p. 73。

⁴¹ 同上、p. 73。

⁴² 石原ゼミナール、前掲書、p. 95。

⁴³ 鳥山、2013、p. 159。

⁴⁴ 城間、前掲書、p. 270。

⁴⁵ 同上、p. 275。

が、英語を話せたことでスパイ扱いされることも多く人一倍用心しなければならなかったという⁴⁶。終戦後は、米軍政府の通訳、嘉手納基地内のPXのマネージャーを務めた⁴⁷。その後、アメリカとの交渉が何かと多いため英語を話せる人をと「城間を越来村の村長に」という話が持ち上がった⁴⁸。

彼の生い立ちを踏まえた上で1951年に彼が記した文章を引用したい。

来るべき講和会議で（沖縄を）返還して貰えなければ日本としては全力を尽くした上のことだから「感情的」に満足できるだろう。然しこの島に引続き住まねばならぬ吾々としてはそう簡単には行かない⁴⁹。

城間のいらだちは『米琉親善の楽園』を説く城間が、その度に呑み込んできた告発⁵⁰ではなかったか。「琉球人」に対するアメリカ、日本からの差別、英語を話せることへの「琉球人」からの疑念の目、住民の要求を米軍に伝える一方通行的な役割を経験してきた城間は「米琉親善」の欺瞞性や虚構性に十分に自覚的であったはずだ。その上で「親善」を生存策としてあえて選択したのである。

「親善」の亀裂は1970年「コザ暴動」という形で顕在化する。だが、「親善」を保つため現実にかかる問題は隠され続けてきた。コザにおいて「米琉親善」の下に隠された最大の問題は「八重島特飲街」であった。売買春の封じ込めである。

2-3. 「八重島特飲街」―「性の防波堤」として―

「ビジネスセンター構想」とほぼ同時期に「八重島特飲街計画」が進められていた。前節で触れた通り、土地開放運動と売買春追放運動は表裏一体であった。この計画は、「一般婦女」を守るための「防波堤」としてビジネスセンターの北側の八重島区に「特殊婦人」を閉じ込めようとしたものである⁵¹。越来村婦人会会長は以下のように回想する。

嘉手納航空隊のキンケイド少将をたずね、私たちの苦しい立場を訴えた。キンケイド少将も困っていたのだろう。「血気盛りの若い米兵だから、こちらの方としてもどうしたら良いか名案がない。米兵の性の問題まで関知するのは難しい」と話す。私たちは、米兵の自粛と特殊婦人の退出を訴えた。「それでは、街外れの野原の八重島に特殊地帯を作ろう。これが一番良い方法だ」という。キンケイド少将の意見に私たちも賛成せざるをえなかった⁵²。

つまり、村側の「基地と一般居住地域との間に緩衝地域を設けることにより、米兵の犯罪を防止しようとする考え方」⁵³と米軍側の「性病の媒体となる売春婦との接触を絶ち、その結果戦力の著しい悪影響を及ぼす性病蔓延を抑止する」⁵⁴というそれぞれ異なる目的のもとで「八重島特飲街」は形成されたのである。コザ周辺では、米兵による強姦、強姦殺人（婦女暴行、致死事件）が頻発していた⁵⁵。米軍側は、性病の発生に頭を抱えており、「占領軍への娼業禁止」、「花柳病取締」、「婦女子の性的奴隷制の禁止」などの布告を続々と発し、性病対策に躍起になっていた⁵⁶。

1949年警察所長会議が売買春を目的とした施設を那覇、胡差、石川、前原に設置しようと提唱しており、当時「性の防波堤」とされたのは八重島ではなかった⁵⁷。それに対し沖縄婦人連合会から「賛成の理由として良家の婦女子の保護というのがあるが同性の犠牲の上に生きるのは私達の本意ではない」⁵⁸など反対の声も出ていたが、「野放しのために被害迷惑を受ける一般女子の人権はどうでもよいのか」⁵⁹という批判の声にかき消されていった。

八重島での売買春は警察も黙認する形で特飲街

⁴⁶ 同上、p. 278。

⁴⁷ 同上、p. 270。

⁴⁸ 城間、前掲書、p. 286。

⁴⁹ 鳥山、2013、p. 159。

⁵⁰ 同上、p. 159。

⁵¹ 石原ゼミナール、前掲書、p. 94。

⁵² 菊池、2010、p. 115。

⁵³ 石原ゼミナール、前掲書、p. 94。

⁵⁴ 同上、p. 94。

⁵⁵ 同上、p. 93。

⁵⁶ 同上、p. 93。

⁵⁷ 同上、p. 94。当時、沖縄において1950年勝連町「松島」、宜野湾村に「真栄原」、1951年小禄に「辻新町」などの特飲街が形成された。

⁵⁸ 鳥山、2013、p. 156。

⁵⁹ 同上、p. 156。

として「発展」していったが、ビジネスセンターは風俗業を入れず「健全」な商業の街として「発展」した⁶⁰。衛生問題や売買春を理由に発せられるオフリミッツ（後述）や米兵による性暴力の問題を八重島特飲街に閉じ込める形でビジネスセンターは住民と米軍が親しく交わる「親善の樂園」となっていく。しかし実際、八重島は「性の防波堤」として機能せず、米兵による性暴力は絶えなかった。『私の戦後史』における城間の回想には八重島に関する記述はない。この売買春の封じ込めが「復帰」後、「コザ」という地名が消された大きな要因となったと考えられる。

2-4. 「島ぐるみ闘争」—オフリミッツによる経済制裁—

1950年代後半、コザには「オフリミッツ旋風」が吹き荒れた⁶¹。オフリミッツとは「治安や衛生上の理由から米軍当局が軍人、軍属、家族に対して特定の民間地域への出入り禁止した令」⁶²である。オフリミッツの発令は、「性病や売春行為を理由として、経済に困窮した風俗営業店に効果的な性病対策を取らせるように仕向ける」⁶³という意味合いを持つ一方で、経済制裁、報復措置（その結果として住民を分断）としての効果も持ち合わせる。

1950年に勃発した朝鮮戦争によってコザは「朝鮮特需」⁶⁴を迎えるが、1954年頃から衛生面重視、性病予防を目的としたオフリミッツが米軍から頻繁に出された⁶⁵。この「オフリミッツ旋風」を背景に「Aサイン飲食店ブーム」が巻き起こる⁶⁶。「Aサイン」は「飲食店や風俗営業、ホテル業者に米軍人・軍属が立ち入ってもいいというAPPROVED（許可済み）の許可証」⁶⁷である。営

業するためには米軍の許可が必要とされたのだ。1953年「Aサイン」は飲食店を対象に発行され、1956年よりバーや風俗店に適用が拡大された⁶⁸。オフリミッツにより特飲街であった八重島が大きなダメージを受けて衰退したことで、センター通りにAサインバーや売春宿が移っていった⁶⁹。センター通りは、60年代、70年代の「ベトナム特需」の中心舞台となった。

「Aサイン飲食店ブーム」が起こった1956年、沖縄全体では「島ぐるみ闘争」が高揚していた。この闘争においてオフリミッツは経済制裁、報復措置として用いられ、沖縄社会とコザの間に分断をもたらしたのである。

「島ぐるみ闘争」は、1954年米軍が接収した土地の地代を一括払いすることで永代借地権を設定しようとしたことに対し、琉球政府の立法院が「一括払い反対、適正補償、損害賠償、新規接収反対」を要求（土地を守る四原則）したことに端を発する⁷⁰。この問題に対処すべく米下院軍事委員会は、M・プライス委員長らを沖縄に派遣した。1956年プライス勧告（報告書）を発表し、軍用地政策を含む米軍の占領統治を基本的に正しいものと認めたため、琉球政府の求める「四原則」を踏みにじるものとして「島ぐるみ闘争」は展開された。

プライス勧告の全文の届いた1956年6月20日、全沖縄64市町村のうち56市町村で一斉に住民大会が開かれ、16万から40万人（全人口の20%～50%）が参加した⁷¹。コザにおいても闘争は高揚し⁷²、1956年6月25日にはコザで第二回住民大会が開かれ、約5万が参加している⁷³。その制裁として米軍は1956年8月8日中部地区に「無期限オフリミッツ」を発令している⁷⁴。発令した当日、中部地区琉大生による「土地問題解決促進大会」及びデモが予定されていたが、オフリミッツで影響を受けた風俗営業者により阻止され、中止に追い込まれる⁷⁵。当時のコザ市長が4日後の8月12

⁶⁰ 石原ゼミナール、前掲書、p. 96。

⁶¹ 石原ゼミナール、前掲書、p. 123。

⁶² 同上、p. 127。

⁶³ 小野沢、前掲書、p. 79。

⁶⁴ 住民は当時の好景気を「1954、55年頃のセンター通り是非常に景気が良かったんです。その頃はほとんど八重島に特飲街があって、センター通りは商店街だったんです」、「その頃の景気はすごかったです。他の人が着れないような服を着て、他の人が食べることが出来ないような物も食べる事ができる商売でした」と証言している。石原ゼミナール、前掲書、p. 99。

⁶⁵ 同上、p. 123。

⁶⁶ 同上、p. 123。

⁶⁷ 石原ゼミナール、前掲書、p. 125。レストラン・飲食

店は「赤のAサイン」、バー・クラブなどは「青のAサイン」、加工食品は「黒のAサイン」と色分けされた。

⁶⁸ 小野沢、前掲書、p. 80。

⁶⁹ 石原ゼミナール、前掲書、p. 126。

⁷⁰ 中野・新崎、前掲書、pp. 79-80。

⁷¹ 新崎、前掲書、p. 16。

⁷² 同上、p. 123。

⁷³ 同上、p. 16。

⁷⁴ 石原ゼミナール、前掲書、p. 123。

⁷⁵ 同上、p. 123。

日、「今後反米的な住民大会に対しては、市長及び教育委員長として、これを許可しないことをここに宣言し陳謝します」⁷⁶と謝罪する事態にまで発展した。

経済制裁、報復措置として用いられたオフリミッツについて当時の住民は「オフリミッツは『立入り禁止になるだけだろう?』というとらえかたをされていますが、我々のような外人相手の商売をしている者にとっては死活問題なのです」⁷⁷と語る。

1956年8月に発令された「無期限オフリミッツ」は、「島ぐるみ闘争」に対する報復措置という明確な意図をもっていた⁷⁸。性病対策ではなく、「大会やデモによって生じるかもしれない『琉球人と米人間の衝突をさけるための予防措置』という名目」⁷⁹により発令されているからである。さらに、「トラブルの心配が全く消えた時には解禁されるだろうが、解禁の時期はその時でないと分からない」⁸⁰と通告している。市長の謝罪により同月14日コザ市に限りオフリミッツは解除された⁸¹。

「島ぐるみ闘争」は、オフリミッツにより土地を接収する米軍と接収された沖縄の対立から、土地を接収された人々とオフリミッツによって生活が脅かされる人々の対立へと変容していった⁸²。米軍による土地接収のために農村として復興することのできなかったコザが、同じく土地を接収された人々と対立せねばならない状況を作り上げられた。こうして「島ぐるみ闘争」に亀裂が入り、闘争は分断されてゆく。その後、「島ぐるみ闘争」は「復帰運動」へと転化していくが、この分断は解消されなかった⁸³。コザは「即時復帰反対」の立場をとり、「即時無条件返還」や「基地撤去」を望む人々と対立したのであった⁸⁴。

⁷⁶ 石原ゼミナール、前掲書、p. 123。

⁷⁷ 同上、p. 128。

⁷⁸ 島山、2013、p. 251。

⁷⁹ 同上、p. 251。

⁸⁰ 同上、p. 251。

⁸¹ 石原ゼミナール、前掲書、p. 123。

⁸² 島山、2013、p. 252。

⁸³ 石原ゼミナール、前掲書、p. 111。

⁸⁴ 「即時復帰反対」に関する当時のコザ住民の証言がある。「正直なところ、あの当時、ゲート通りやセンター通りでAサインバーをやっていた人たちは、復帰することには全員反対でした。通りの人たちはあの異常なまでのよい景気を経験しているものですから、誰も復帰しよ

3. Aサイン社会—「米琉親善」の破綻—

「基地の街コザ」は戦争が起こると「活気」に溢れる。ベトナム戦争抜きにコザを語ることはできない。1960年代後半から70年代前半の「ベトナム特需景気」は、コザの「最盛期」である⁸⁵。

1965年より継続的な北爆が開始されベトナム戦争がアメリカの戦争になっていくと同時に、沖縄が直接的に戦闘行動に巻き込まれていった。沖縄は出撃基地かつ帰還兵の休養地としての役割を果たしていた⁸⁶。

本章では、喜屋武幸雄・眞理子夫妻に焦点を当てながらベトナム戦時期の「Aサイン社会」⁸⁷で生きた人々が抱えた「米琉親善」の矛盾、そして顕在化してゆく「親善」の亀裂を明らかにしていく。

3-1. 「ベトナム戦争の最前線」Aサインバー

コザのロックミュージシャンは「支配者である米兵を相手に最前線で闘ってき」た⁸⁸。その意味で、Aサインバーは米兵とロックミュージシャンとの交わりのある場であり、闘いの場でもある。彼らは、支配者と被支配者の関係でありながら、客と演奏者という奇妙な関係でもあるのだ。

うとは思わないです」(同上、p. 436)。1956年「島ぐるみ闘争」以降1960年代前半までのコザの状況を本稿では扱っていないが、1958年頃から上下水道や道路などの都市としての基礎が出来はじめた。1960年代に入り、コザ市の人口は約5万人に達する(1962年)。同じく1962年1月にコザ市観光協会、6月にコザ市Aサイン協会が設立された。Aサインが新基準になったことでオフリミッツ旋風が起こり、Aサイン取り消しが相次いだ。1963年には11月より在沖米軍のベトナム派兵が始まった(同上、p. 173)。

⁸⁵ 「ベトナム特需景気」に至るまでの(1950年代後半～1960年代前半)コザの状況を確認したい。1958年沖縄では通貨がB円からドルへと切り替わった。当然ながらドルの発行権はアメリカが持っているため、沖縄経済の根元をアメリカが握ることとなる。ドルによる直接取引が行われることによって、基地収入の増加が見込まれたが、それは同時に基地経済に益々依存させられることを意味した。1960年代前半は「キャラウェイ旋風」によって、特にコザは「Aサイン」制度の新基準に頭を悩ませた。

⁸⁶ 石原ゼミナール、前掲書、p. 229。

⁸⁷ 「Aサイン社会」は、石原が『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』にて用いた造語である。「Aサイン社会」とは、「小さなアメリカ」であり、「異民族支配の象徴的産物」であったとしている。

⁸⁸ 石原ゼミナール、前掲書、p. 7。

喜屋武幸雄・眞理子夫妻はコザのAサインバーで演奏していた沖縄ロックミュージシャンである。幸雄は、1942年那覇生まれ、沖縄人の母と日本人の父の間に生まれ、育ての父は異なる⁸⁹。戦後、母はアメリカ人の子供を身籠り、ハーフの妹が生まれた⁹⁰。喜屋武家はセンター通りにてAサインバー（売春宿）を営み生計を立てた⁹¹。1960年、幸雄は集団就職で「本土」へ行き、1964年に沖縄に戻りロックバンド「ウィスパーズ」を結成した⁹²。

一方眞理子（通称マリー）は、1951年中城村生まれ、沖縄人の母と米兵の父の間に生まれたハーフである⁹³。マリーは幼少の頃から「ハーフ」であることを理由に「アメリカー、アメリカー」といじめられてきたという⁹⁴。彼女は小学生の時、那覇からコザへ移った。「コザへ来たときは、ほっとした」、「ハーフがたくさんいたから」と後に語っている⁹⁵。彼女の母はコザのAサインバーで働いていた。1968年に2人は結婚した⁹⁶。「彼がロックやる人でなかったら、一緒にならなかったよ」と彼女は言う⁹⁷。マリーは、1971年幸雄が結成したバンド「ジグザグ」で1974年にキーボード兼シンガーとしてデビューする⁹⁸。

サラリーマンの月給が50ドル前後、1000ドルあれば家が建つ時代に、ウィスパーズは月4000ドル近く（最盛期）稼いでいたという⁹⁹。Aサインバーは争ってロックバンドを招き寄せた。演奏を聞きながら米兵たちは左右に女を座らせ一杯50ドルの酒（1994年当時一杯20万、50万の酒）を20杯、30杯と飲んだ¹⁰⁰。

ウィスパーズは米兵の要求するヒット曲のコピーに追われながら、腕を上げていった¹⁰¹。時には「下手くそ」と米兵にビール瓶を投げつけられた。米兵の目には沖縄人ロックミュージシャンと

ベトナムで敵対する「ベトコン」の姿が同一に映り、幸雄たちは敵意を剥き出しに飛び掛かれたこともある¹⁰²。

幸雄とマリーのアメリカに対する感情は異なる。「ハーフ」という言葉一つとってみてもその意味や捉え方は違うのだ。アメリカンロックに対する憧れや純粋に音楽の腕を上げたいという願望を持っていた幸雄は、自らの生い立ちを振り返りアメリカに対する感情を次のように語っている。

私の妹も、マリーもアメリカさんとのハーフだし、祖母もアメリカさんに轢き殺されるといったように、アメリカ人が占領軍ということで乗り込んできたために、うちの家庭はグシャグシャになっている部分があるのです。私は今でもアメリカさんは嫌いです¹⁰³。

彼にとって「ハーフ」は褒め言葉だ¹⁰⁴。しかし、ハーフという言葉はマリーや妹を思い出させる。アメリカによって家庭が壊されたという思いが少なからずあるのだ。支配者であるアメリカのカネで生計を立てることへの疾しさもあるだろう。彼の中には憧れや嫌悪や疾しさと矛盾する感情が同時に存在していたのである。

一方マリーは、利根川の「あなたは、アメリカが憎い、とか、アメリカが嫌い、と思ったことはない？」という問いかけに「ないよ。一度もないよ。これも彼（夫）とは大違いね。こう思うのは、やっぱり自分がハーフだからかな」と答える¹⁰⁵。

ステージに立つようになってから、マリーは変わった。（中略）ロックの演奏の場は、小さなアメリカである。（中略）ここでは、アメリカ似のハーフ顔を、いぶかしげにのぞき込むものはいない。自由にアメリカ語をしゃべるハーフを、あやしげにとがめだてするものはいない。（中略）小さなアメリカが、彼女を抑圧から解放する¹⁰⁶。

彼女にとってハーフとは、自分自身を表す言葉で

⁸⁹ 利根川、前掲書、p. 20。

⁹⁰ 沖縄市企画部平和文化振興課、1999、p. 132。

⁹¹ 利根川、前掲書、p. 58。

⁹² 沖縄市企画部平和文化振興課、前掲書、p. 144。

⁹³ 利根川、前掲書、p. 18。

⁹⁴ 同上、p. 29。

⁹⁵ 利根川、前掲書、p. 30。

⁹⁶ 石原ゼミナール、前掲書、p. 310。

⁹⁷ 利根川、前掲書、p. 81。

⁹⁸ 同上、p. 105。

⁹⁹ 同上、p. 96。

¹⁰⁰ 沖縄市企画部平和文化振興課、前掲書、pp. 151-152。

¹⁰¹ 利根川、前掲書、p. 95。

¹⁰² 石原ゼミナール、前掲書、p. 316。

¹⁰³ 同上、p. 425。

¹⁰⁴ 同上、p. 156。

¹⁰⁵ 同上、p. 39。

¹⁰⁶ 利根川、前掲書、pp. 105-106。

あり、同時に彼女（ハーフ）に対する沖縄社会からの嫌悪、憎悪、拒絶、懲罰、断罪を表す言葉であった。彼女の存在は「許されなかった」のである。

3-2. 「コザ暴動」―燃えるコザ―

1970年12月20日、「コザ暴動」¹⁰⁷が発生した。この「コザ暴動」こそ「親善」の亀裂が決定的に顕在化した瞬間であった。「コザ暴動」は「同年9月に起きた『金城トヨさん轢死事件』に端を発し」¹⁰⁸たもので、「群衆数千人が米人車やMPカーなど82台を焼き、さらに嘉手納基地に突入、軍施設を焼」¹⁰⁹いた。当日20人が逮捕された。「復帰」の2年前であった。

「コザ暴動」は、これまで「県民の怒りの爆発」としてしばしば語られてきた。しかし、「コザ暴動」に参加した「県民」とは一体誰であったのだろうか¹¹⁰。本節では、幸雄・マリー夫妻を通してその問いを考えたい。

利根川は「コザ暴動」を以下のように描写する。

外へ飛びだしてきたAサインの経営者や、アメリカ相手の店主たちが、みんな陽気にはしゃいで、騒ぎの群衆に味方しているのである。これまで、官公労や全軍労のストライキがあって、組合員たち基地の前にピケラインを張ると、これらの経営者や店主たちは、血相を変えて殴り込みに行ったりした。（中略）ところが今夜はまるで様子が違っている。アメリカに味方しようとする人が、全然いない。バーテンやボーイたちは、ケツケと笑って浮かれながら、石を投げ、石を運んでいる。店の客であるはずのアメリカ兵が殴られ蹴られるたびに、あざけりの

喚声をあげ、仲間と肩をたたき合ってはやしたてる¹¹¹。

誰が指示、誘導するわけでもなくAサインバーのボーイやバーテン、ホステス、経営者たちが「群衆」と化していく。幸雄がまさにその一人であった。彼は、一緒に車に乗っていた米兵をこっそりタクシーで帰した¹¹²。その後、彼はイエローナンバーの車をひっくり返し、火をつける群衆の中に混ざっていく。

幸雄は、彼と同じように石を投げ、火を放つAサインで働く若者に自分を見てとった。「君らも、やっぱり、そうだったのか。おれとおなじように、やっぱり、そうだったのか。（中略）君らも、やっぱり同郷人たちのきびしく射る目を知っているんだ」¹¹³とこみあげる涙で熱くなった。そして、「君らも、やっぱり、そんな自分が腹立たしく、口惜しく、やりきれないんだ」¹¹⁴と続ける。だが彼は、翌日金武で「イエイ、ピース」と再び米兵相手に演奏をするのである¹¹⁵。

1973年彼はバンド活動をやめた。「昨日、アメリカ人を殴った手で、なぜ、そのアメリカ人みんなを相手にして“ピース”と言わなければならないのかな」¹¹⁶と矛盾を感じたのだ。「コザ暴動」後のある日、米兵が「ケニーはハーフだろう？」と話し掛けた。いつもであれば受け流す幸雄だったが「なに。ハーフ。ハーフなんかじゃない。ハーフであってたまるか。おれは沖縄の人間だ」¹¹⁷と声を荒げたという。

彼の「ハーフなんかじゃない」、「沖縄の人間だ」という言葉は「親善」の欺瞞の告発である。彼の憧れるアメリカは、彼を支配する統治者である。彼の奥底まで深く入り込んでいた「矛盾」を彼自身が受け止めたのだ。

一方、「コザ暴動」にマリーは参加しなかった。

燃える夜空の下で、マリーは祭りには参加して

¹⁰⁷ 本書では「コザ事件」と表記されているが、書き手によってその表記の仕方は異なる。「コザ事件」の他に、「コザ反米騒動」とも表記されることもある。本稿では、通称に倣い「コザ暴動」と表記する。

¹⁰⁸ 石原ゼミナール。前掲書、p. 396。

¹⁰⁹ 同上、p. 396。

¹¹⁰ 本書では数多くのAサインバー経営者、ロックミュージシャンらの証言を用いてそれぞれの「コザ暴動」の体験を紹介している。「コザ暴動」を「戦争への恨みと反発」と捉える者、群衆を自分の店のある通りに入れまいと追い払った者、普段の生活通り休んでいた者、気付かず過ごした者、様々であった。

¹¹¹ 利根川、前掲書、pp. 131-132。

¹¹² 同上、p. 123。

¹¹³ 同上、p. 154。

¹¹⁴ 同上、p. 154。

¹¹⁵ 沖縄市企画部平和文化振興課、前掲書、p. 166。

¹¹⁶ 石原ゼミナール、前掲書、p. 427。

¹¹⁷ 利根川、前掲書、p. 157。

いない。マリーは幸雄の行動を、息をつめて見守りながら醒めている。(中略)彼女は、まわりから石を投げられていた遠い自分の過去を思いおこしていた。あの人たちは、幼い私に対しても激しい憎しみの炎を胸の中に燃えさせたのだったろうか。『アメリカへ帰れ』と浴びせられた、ののしり声がよみがえる。(中略)そしていま、目の前ではアメリカを罵倒する群衆の声に囲まれて、彼女の夫である幸雄が、アメリカに向かって火を放ち、石を投げつづけている。そういう幸雄とは、いったいどういう人間なのだろう。彼の中には、私に向かって投げたい石もあるのだろうか¹¹⁸。

マリーは、幸雄を心配し彼の姿を目で追う。しかし、目で追いながらもマリーは醒めている。「これが沖縄の人の、どこか心の底に眠らせていた祭りであるとするなら、その祭りに素直に参加できないマリーは、沖縄の人間ではないのかもしれない」¹¹⁹と思う彼女は、アメリカ人とも沖縄人とも隔たりがあった。いや、アメリカ人により近かったのだろうか。「ハーフ」という存在はアメリカ人と沖縄人の真ん中に位置しているわけではない。「ハーフってことだけでいじめるのよ。(中略)ハーフだってことが気に入らないのね」¹²⁰とマリーは語る。そんな彼女を利根川は「ときたま金網の中の人であり、そしてまた金網の外の人である」¹²¹と記す。

ハーフである彼女の存在は、「Aサイン社会」の存在と限りなく近い。コザは、アメリカにより近い場所でありながら、アメリカではなく、沖縄の街ながら「沖縄」と対立し相反する存在であった。誤解を恐れず言えば彼女やコザは「親善」そのものである。幸雄のように具体的にこういった矛盾を抱えていたと述べるのが困難だ。ただ、「ハーフ」であることが、彼女の存在が第三者に矛盾とみなされるのだ。

マリーが向けられた嫌悪、憎悪、拒絶、懲罰、断罪の目は、コザに向けられた非難の目と重なる。だが、「コザ暴動」で露わになったのはコザ住民の

アメリカに対する非難の目だ。彼女の存在はなぜ矛盾とされなければいけないのか。彼女の存在は一体何だというのか。

彼女は、「あの夜、夫妻の間に埋められないほどの遠い距離があるのではないか」¹²²、「夫の石が、ひょっとすると自分に向けられるかもことがあるしれない」¹²³と思ったという。彼女はその途方もない距離感を抱えコザで生きていた。「コザ暴動」の夜、幸雄とマリーは共に自らの生い立ちを思い起こした。一方は、アメリカにグシャグシャにされた家族を、もう一方は「アメリカー、アメリカー」と罵られた過去を。夫婦の奥底まで「米琉親善」の亀裂は入り込む。一人、一人の生き様に深く刻まれているのだ。

「コザ暴動」が「県民の怒り」の爆発であったことは間違いない。だが、「県民」とは誰なのか。その「怒り」とは何なのか。幸雄とマリーの間にある途方もない距離は「県民」という言葉で埋めることはできない。「汚い仕事で金儲け」する幸雄やアメリカとのハーフのマリーと彼らを、そしてコザを非難の目で見ると同じ「県民の怒り」を共有していると言えるのか。「コザ暴動」は、「米琉親善」の亀裂の顕在化であるが、人々が抱えた矛盾や怒りは決して一様ではなく、決して矛盾が解消されたわけではなかった。「コザ暴動」に参加したコザ住民は亀裂が入った「米琉親善の楽園」でその後も矛盾を抱えながらの生活が続いた。

「コザ暴動」後、10日間のコンディショニンググリーン(米軍人の外出禁止令)が出され、1971年明けまでオフリミッツが発令された¹²⁴。コザはゴーストタウンと化し、基地関係業者は、「損失はもはや取り戻すことは出来ない。琉米親善の町というコザのイメージも壊され恐ろしい暴力の町として受け取られている。(中略)県民の問題なら那覇の行政府前でやったら良い。コザ市内では今後如何なる反米活動も認めないし、集会の場も与えない」¹²⁵と激昂した。その後、1971年「ニクソン・ショック」によりコザは「ドル・ショック」に陥り、ベトナム戦争終結と共に「ベトナム特需景気」は静かに

¹¹⁸ 利根川、前掲書、pp. 134-137。

¹¹⁹ 同上、p. 133。

¹²⁰ 同上、p. 38。

¹²¹ 同上、p. 39。

¹²² 同上、p. 159。

¹²³ 同上、p. 159。

¹²⁴ 石原ゼミナール、前掲書、p. 432。

¹²⁵ 同上、p. 432

終わりを告げる¹²⁶。

4. 地図から消えたコザ

1972年5月15日「アメリカの沖縄」は「復帰」を経て「日本の沖縄」となった。その2年後の1974年、コザは「沖縄市」へと名称が変わり、「国際文化観光都市」に指定された。「基地経済からの脱却」を模索しながら、「文化的要素」を強調する観光都市を目指した¹²⁷。

かつてのように米軍の許可を受けずとも自由に飲食店を営業することができるようになった。コザの店には「ジャパニーズオンリー」の張り紙を掲げられ、米軍人はお断りの風潮へと変わった¹²⁸。センター通りも大きな変貌を遂げた。1985年「清潔さ」を売りにした商店街「中央パークアベニュー」へと生まれ変わった¹²⁹。米兵ではなく「日本人」観光客を対象とした街づくりに方向転換したのである。

コザは現在（2013年）どうなっているのだろうか。沖縄市が発行する観光情報マップは「THE KOZA MAP」、「ザ・コザマップ」¹³⁰という名称であり、「コザ」を売りにした作りとなっている。かつてのゲート通りはコザゲート通りとなり、英文字表記の看板が建ち並び米兵が行き交う。「コザ」という名を街の至る所で目にするのだ。「性の防波堤」とされた八重島特飲街の面影はもはやないが、コザゲート通り周辺に風俗営業の店がひっそりと建ち並ぶ。ショークラブには「日本人大歓迎」の看板が残り、ライブハウスからは大音量のアメリカンロックが流れる。生まれ変わったはずであった「中央パークアベニュー」はシャッター街と化した。コザゲート通りの米兵向けのバーやライブハウスのネオンがきらめく。

一見、かつての「Aサイン社会」と変わらない

様相に見えるが、かつてコザを作り上げた「親善」は消えてしまった。沖縄市は「米琉親善の楽園」ではないのだ。かつては米兵と住民の交流（欺瞞に満ち溢れていたが）というあるひとつの目的に沿って街は作られたが、現在のコザの街は混沌としている。街の方向性や指針が見えないのである。

なぜ沖縄市は日本の一地方都市であるにも関わらず「日本人大歓迎」の看板を立てなければならないのか。なぜ英語の看板の店ばかり通りに立ち並ぶのか。なぜ米兵はさも自分のホームタウンかのように我が物顔で道を歩くのか。なぜアメリカンロックがこんなにも流れているのか。ここは一体どこなのだろう。

「沖縄市」や「国際文化観光都市」などと名称を変えようとも、27年間「基地の街」としてやってきた生活の在り方、積み重ねてきたコザの記憶が街に深く深く刻まれており、そう簡単には消えないのだ。そこはもう「親善の楽園」ではなくなったが、日本の一地方都市にもなれなかった。「コザ」という地名が地図上から消されてもコザの記憶や積み重ねてきた時間は消えない。「基地の街コザ」は今も生きている。

¹²⁶ 1971年8月15日、ニクソン大統領が8項目からなる「ドル防衛策」を発表した。失業対策、インフレ対策及びドル防衛策の3つからなる新経済政策であった。この「ニクソン・ショック」によってドル経済であった沖縄及びコザは大打撃を受けた。

¹²⁷ 石原ゼミナール、前掲書、p. 479。

¹²⁸ 同上、p. 488。

¹²⁹ 同上、p. 618。

¹³⁰ 沖縄市文化観光課・沖縄市観光協会、ザ・コザマップ（2012年7月31日発行）。

参考文献

- 新崎盛暉『沖縄現代史 新版』(2005) 岩波書店。
- ウエスリー上運天「怒りの海からの奮起—アメリカ軍占領下の沖縄におけるコザ蜂起」富山一郎・森宣雄(編)『現代沖縄の歴史経験 希望、あるいは未決性について』(2010) 青弓社。
- 大城立裕「沖縄8 コザ」朝日新聞社(編)『朝日ジャーナル』(1977) 朝日新聞社。
- 沖縄市企画部平和文化振興課『米国が見たコザ暴動』(1999) ゆい出版。
- 『ロックとコザ 改訂版』(1998) (初版 1994) 那覇出版社。
- 沖縄市文化観光課・沖縄市観光協会「ザ・コザマップ」(2012年7月31日発行)。
- 小野沢あかね「米軍統治下沖縄における性産業と女性たち—1960—70年代コザ市」(2013)『年報日本現代史』18号 東出版。
- 加藤政洋『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』(2011) FOREST。
- 川平成雄『沖縄 空白の一年 1945 - 1956』(2011) 吉川弘文館。
- 菊池夏野『ポストコロニアルとジェンダー』(2010) 青弓社。
- 城間盛善「私の戦後史」『私の戦後史 第6集』(1972) 沖縄タイムス社。
- 桃原一彦「米軍基地周辺市街地におけるインナーエリアの空洞化と都市下層—旧コザ市における『二極化』の諸相—」『沖縄国際大学社会文化研究』(Vol.10 No.1) (2007) 沖縄国際大学社会文化学会。
- 利根川裕『喜屋武マリーの青春』(1989) ちくま書房。
- 鳥山淳「閉ざされる復興と『琉米親善』 沖縄社会にとっての一九五〇年」中野敏男・波平恒男・屋嘉比収・李孝徳(編)『沖縄の占領と日本の復興 植民地主義はいかに継続したか』(2006) 青弓社。
- 「1950年の諸相から見える基地と占領 嘉手納基地とコザの動きを中心に」沖縄市企画部平和文化振興課(編)『KOZA BUNAK BOX』(第5号) (2009) 沖縄市企画部平和文化振興課。
- 「占領下沖縄における成長と壊滅の淵」大門正克・他(編)『高度成長の時代3 成長と冷戦への問い』(2011) 大月書店。
- 『沖縄／基地社会の起源と相克 1945 - 1956』(2013) 勁草書房。
- 仲里効『オキナワ、イメージの縁』(2007) 未来社。
- 中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』(1976) 岩波書店。
- 波平恒男「戦後沖縄都市の形成と展開—コザ市にみる植民都市の軌道—」(2006)『沖縄国際大学総合学術研究紀要』(第9巻 第2号) 沖縄国際大学。
- 「アメリカ軍政下の戦後復興 一九五〇年前後の沖縄、そして奄美」中野敏男・波平恒男・屋嘉比収・李孝徳(編)『沖縄の占領と日本の復興 植民地主義はいかに継続したか』(2006) 青弓社。
- 『『軍作業』の原郷—旧コザ市を中心に—」沖縄市企画部平和文化振興課(編)『KOZA BUNAK BOX』(第6号) (2010) 沖縄市企画部平和文化振興課。
- 宮里政玄・新崎盛暉・我部政明(編)『沖縄「自立」への道を求めて 基地・経済・自治の視点から』(2009) 高文研。
- 山崎孝史「USCAR 文書からみた A サイン制度とオフ・リミッツ」沖縄市企画部平和文化振興課(編)『KOZA BUNAK BOX』(第4号) (2008) 沖縄市企画部平和文化振興課。
- 「軍事優先主義の経験と地域再開発戦略—沖縄『基地の街』三態—」沖縄市企画部平和文化振興課(編)『KOZA BUNAK BOX』(第5号) (2009) 沖縄市企画部平和文化振興課。
- 琉球銀行調査部(編)『戦後沖縄経済史』(1984) 琉球銀行。

沖縄市ホームページ「沖縄市の基地概況」(アクセス日 2013年9月13日)。

(かねこ ありか・東京外国語大学大学院博士前期課程)